

現 地 通 信

ジャワ島の調査旅行から

吉 井 良 三

跳虫という、昆虫のなかでも特に下等で、まだ翅のない群が私の年来手がけてきた対象物である。それを中心にして、東南アジアの生物と取り組んでみたいという漠然とした気持が学生時代からあった。戦前に機会があって、シンガポール、コロンボなどで資料を得、また南極に行くときには、その機会も利用し、熱帯湿润地については、かなりはっきりしたものはあったが、さて本格的に東南アジアとなると、私もいささかとまどいした。とりあえず、できるだけ広く全地域を概観してみよう。それから個々の重点に、インテンシブな調査を行ないたい。そのような意図で、1965年の春には、フィリピン、ジャワ (Djawa)、マレー、タイを旅行させていただいた。その経験によって、私の調査については、雨期が望ましいこと、特に交通の困難さを考えると、雨期明けをねらうこと、それから、東南アジアといっても、ローカルな要素が多くて、マレーとフィリピンとでは、アプローチのやり方にも、たいへん差違があることがわかった。

文献についてみると、東南アジアの各地から、既に知られている種類がある。それを仕分けると表1のようなものが出来た。これはもちろん大まかな数字である。これについてみると、ジャワ、スマトラ (Sumatra) が他より群をぬいてよく知られている。しかし、その数字は日本の $\frac{1}{2}$ にすぎない。生物の分布の通例として、その種類数は熱帯に近づくに従って増加するので、これを、かりに日本の2倍とすると、全体の $\frac{1}{2}$ あまりが知られていることになる。それならば、東南アジアのどこを手がけてもいいではないか。ただ、全地域を広範囲に調べることと共に、ある地域をかぎって、そこに重点をおくことが望ましい。そこで、第2次の調査としては、未だ全く報告のないとこ

表1 東南アジアにおける跳虫の既知種数
(1940年現在)

地 名	既知種概数	報文数
ベ ト ナ ム	80	3
カ ソ ボ ジ ア	0	0
ラ オ ス	0	0
タ イ	20	1
マ レ ー	40	6
ビ ル マ	5	3
フ イ リ ピ ン	20	2
ボ ル ネ オ	12	1
ジャワ・スマトラ	100	13
モ ル ッ カ 群 島	4	3
西 イ リ ア ン	5	1
ホ ン コ ン	1	1
台 湾	25	5
中 国 大 陸	47	6
日 本	320	30以上

ろ、Terra incognita にするか、あるいは逆に、すでに知識の集積されているところから出発するか、であった。私は第2の方法をとり、ジャワ本島から始めることとした。幸いにして、春の旅行の途次、ボゴール植物園長スマルトその他の人々とも旧知になっている。大使館の方々にも調査の要領は了解が得られているので、その点は心強い。センターの農村調査の一環として酒井敏明君が参加することとなり、また、おなじ土壌生物の調査で、タイ、マレーの経験のある今立源太良君を同行することで、万端の手配をととのえた。ビザ申請に先立って、思いがけずインドネシアの教育省から、Invitation letter がまい込んだ。春の旅行のとき、そんな話をしておいたが、政情不安のときでもあり、あまり頼りにはしていなかったもので、これはたいへん有難かった。それにもまして幸いなことは、ウィーン大学 Prof. Kühnelt からの申入れであった。この教室は土壌生物の研究では重要な地位をしめている。その教室員のひとりが、先年、ジャワに住みついて、熱帯林の仕事をしている。そのときの跳虫の

資料を、そっくり送って来られた。これを私の調査資料にプラスすれば、東南アジアの第1の地点、ジャワは片がつく。

例のごとく、旅券とビザでギリギリの日限りになり、羽田からとび立つ。

7月12日、クマジョラン(Kemajoran)空港の人ごみのなかで、手続きはフリーパスに近かった。甲斐参事官のお迎えもあったためと思うが、まずまず第1関門を通過、華僑や他の外国人は、それほど簡単には通っていなかったように見うけられた。教育省の Invitation letter も、かなり光ったらしい。とにかく Hotel Indonesia におちつく。ジャカルタ(Djakarta)の町のなかであって特別の地区であるこのホテルは、外貨でしか支払が利かない『長崎の出島』である。ルピアは4カ月以前とくらべると、更に下落していて、法外なものになっている。ジャカルタにいかざりには、このホテルに居なければならぬので、部屋代はケチれないが、外食をすることにして、それでかなりの節約になる。先ずは恒例にしたがって、中央官庁との折衝からはじめねばならない。

インドネシアで何かの仕事しようとするとき、専用の自動車を持つことは、最小限の要求である。官庁の執務時間は午前中だけ、それも上級の責任者ともなれば、10時以後でなければ顔を出さない。アポイントメントがあっても、臨時の閑議もある。日曜日のほかに金曜日もおやすみ。祭日も多い。つまり10時~12時のゴールデンアワーがあつて、そのあいだに官庁のあいだを走りまわり、あとの時間はボヤックとしている以外にない。バスその他の交通機関はあつても、終戦後の日本の交通事情とかかわらず、そしてリンタクのベチャを乗り廻すにはジャカルタの町は、あまりにも広い。この状況に適應するためには、われわれには、いささかの努力を要する。翌日の予定を立ててはならないので、次になすべきことの順序だけを立てておく。それがいつ実現するかは、アラーの神のおぼしめしである。ここでも、甲斐さんに、さんざんご厄介になった。忙しい時間をさいて、我々の希望をきいていただき、車を借用したので要路の折衝がうまく、思うよりも早く解決していった。ジャワ島のうち、比較的 dry な東部ジャワを割愛することとし、7月のうちに

西部ジャワの各地を調査、いったんジャカルタにかえってから、森林省のゲストとして中部ジャワの調査を行なう。それを正味10日間として、8月中旬以降は、次の行動を考えよう。そうすれば、治安上の問題の多い地域も、うまくカバー出来るうえに、森林省からジープを提供してやるとのこと、まことに、願ったりかなったりの話である。

Hotel Indonesia のマネージャーと戦いをまじえる。Hotel に専属のタクシーがある。タクシーといつても、ドライバーぐるみで、時間制で借り上げるので、さもなくば帰りの途が確保されない。それが予約でいつもフルに働いているのを、とにかく1週間借り上げることにした。1日に7ドルの約束である。オンボロの Mercedes-Benz, それでも、とにかく走る。マネージャーはジャカルターバンドン(Bandung)の国道1号線に限ると条件をつけたが、これはドライバーとの話合いで、何とでもなるだろう。滞在すでに2カ年に近い言語学の崎山君の同行を得て、7月16日の朝まだきに、ジャカルタをあとにする。ボゴール(Bogor)街道に、低オクタン燃料のエンジン・ノッキングの音をひびかせながら。

ボゴールとバンドン

サラ火山(G. Salak)が聳えている。このあたりの火山性の台地をチサダネ河(Tjisadane)が解析している。その残丘をしきって、広大な森林が自然公園として保護されている。ジャカルタに面した部分は大統領の官邸にあてられ、白亜の館が見える。たくさんのシカがいる。在留日本人は奈良の鹿だと思っているが、それは4頭だけで、大部分はインドジカである。残りの広大な部分はオランダ時代からのボイデンゾルグ植物園で、ここを中心にして研究機関が集まっている。インドネシア大学はジャカルタにあつて、ここにはその農学部があつたが、先年独立して、生物学中心の大学となった。植物園長が、同時にその management をとりしきっているらしい。それと並行して、学術会議にあたるものがある。長は Prof. Kamto Utomo, アメリカ仕込みの人類社会学者である。この人が、センター関係との当面の相手になる。酒井君の研究分野から、この人や、農業地理の教授を歴訪する。例によって、時間のロス、はなはだしい。幸にもこん

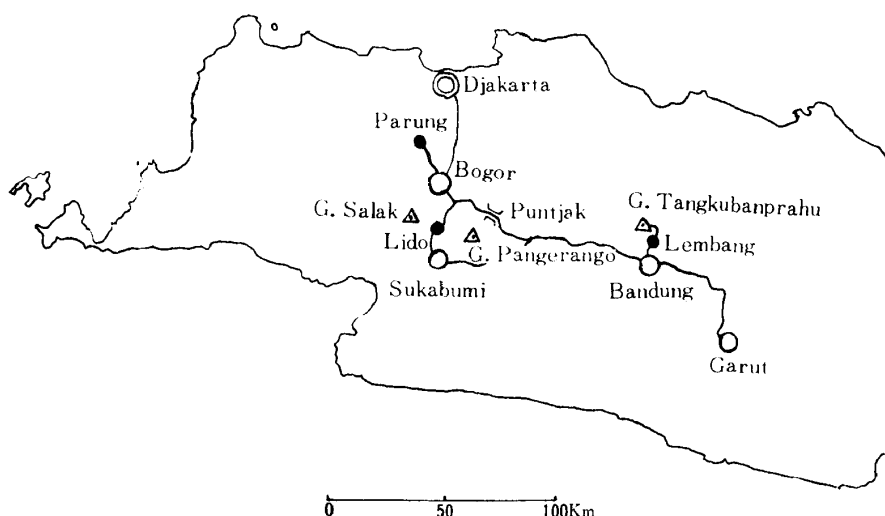


図1 西部ジャワ

どは足があるので、ボゴールの町なかを走りまわる。植物園と、その周辺は、第1回のときに資料を集めているので、今度は問題にしない。3カ月あまりの滞在のうち、バンドンに向う。ジャワは火山の島ではあるが、やはり脊梁山脈が東西にのびている。バンドン盆地にこえるところがプンチャ（Puntjak）峠—はるかには北部平原を見はるかす壮大な眺めがある。このあたり、エステートの名残りの茶園が広がっているが、茶樹そのものも古く、どうも管理が集中的でないように見うけられる。宇治にくらべてはいけませんが、マレーのカメルン高原とならば比較してもいいだろう。峠の近くには、オランダ時代からの館が多い。気候もジャカルタとは比べものにならない。それが、今は政府高官の邸宅ときく。何のことはない、日本ならば鎌倉や、箱根にあたるのであろう。峠の茶屋は満員、ここの湯麺はうまかった。そして石灰岩地を通してバンドンにつく。この辺には洞穴が多い。グア・パワン（Gua Pawan）というのをのぞいてみる。大したものではなかったが、100m くらいの延長である。洞穴生物を見つける。

何やらの会議があるとのことで、AA 会議のあったあたり、ホテルはすべて満員。これはジャカルタを出るときから聞いていた。およそホテルらしいものは、政府関係でいっぱい、入り込めない。客棧のようなものでガマンしなさい。私はジャワへ遊覧に出かけたわけでない。デラックス・ホテルに泊りたければ、何もジャワに来なくても、東京で結構たのしめ

る。いささか、最初のうちは気持のよくなかった木賃ホテルも、蚊には抗マラリヤ剤をのみ、南京虫の夜襲のためには、サロンを寝袋状に加工して、BHC を散布して OK、むしろ、この方が好都合であり、便利が多かった。床の上を資料整理でゴタゴタしても、気がねなくてすむ。この状況は中部ジャワでも同じであった。

バンドンの町では仕事にならない。ドライバーと相談して、町外れのルンバン（Lembang）の村にゆく。それからグノン・タンクバンプラフ山（G. Tangkubanprahu）という、長ったらしい山にポイントをおく。ドライブウェーが、2,000m の頂上の近くまである。まずは伊吹というところであるが、頂上には火口があり、噴煙をつづけている。登るにしたがって、植生が変わってゆく。はじめは Pinus が多かった。それがナギ Agathis に変わり、下生えにシダが多くなる。頂上附近では、また様子が変わって、ウバメガシの類が出てくる。このような高度変化に対応して、林床の生物も変ると思われるので、それをおさえながら、登り、降りる。ジャワの調査は現場ではわりあいに楽である。

バンドンにかえりつき、エマヌエル病院に梅山猛博士を訪う。夫人のご好意の日本食をいただく。幼稚園を開いておられる。日本に帰っていたあいだ、お手伝いの人にまかせておいたら、そのあいだ、おなじひとつの遊戯しかやっていなかったとのこと。そんなに楽しいところである。バンドンの東、ガル（Garut）にゆく。ここも火山に周囲をかこまれた盆地であった。

帰途を西にとり、印度洋側にまで出たかった。プラブハンツ・ラツ (Prabhantu Ratu) には大林組がビーチ・ホテルをつくっているというので、そのあたりの資料がほしかった。スカブミ (Sukabumi) まで来ると、ドライバーが心配しだした。オンボロのベンツでは心もとない。ジープでないと、シャフトを折ってしまいそうだ。事実、このジャワ島内に関するかぎり、道路網はたいへんよく発達している。山間部にまで、立派なハイウェイが通じている。そして、人口の密である加減もあって、村落が多いし、人家の見えないところは少ないくらいである。残念なことには、戦後の日本とおなじように、補修が十分でない。広い道路と、大きなアナボコでは、ジープが蛇行して、パチンコのタマのような走法をやる。ハンドルを切りちがえてアナボコに入れば、大ショックである。普通の自動車では、一巻のおわりになる。その一巻のおわりが、街道すじの所々に見られた。スカブミは静かな眠ったような町の印象であった。京都に留学中のサヌシ君の家を訪れて、タピオカだんごをごちそうになる。それから中央山地帯の西側をこえてチボゴン (Tjibogong) 湖畔のリド (Lido) に泊る。なだらかな斜面に段々畑の水田がひらけている。酒井君がしきりに写真にしている。

ボゴールに再来、先日不在だった教授と教室を訪う。またジャカルタにもどって来たのが7月28日であった。

中部ジャワへ

研究の関係で出発のおくれた今立君をむかえて、中部ジャワに進出する。7月30日午前8時30分とガルーダ航空にブッキングはしてあるが、飛行場には6時に行くべし、従ってホテルは5時に出るべし、タクシーは前夜に約束のこと、それでフライトがキャンセルされれば、帰りの足はありません、とのこと。幸にしてエレクトラは飛び立ってくれたので、1時間でスマラン (Semarang) についてしまった。雲海の上をとぶ。富士山型の3,000mクラスの山々が、雲海をかぶって、ニョキニョキと並んでいる。チュルマ山 (G. Tjerme), スラマツ山 (G. Slamet), プラフ山 (G. Prah), スンドロ山 (G. Sundoro), スンビン山 (G. Sumbing) と、送迎にいとまがない。やがて機が低くなり、ジャワ海の海岸線がみえだした。何やら、海岸に近く、人工が加えられている。あとで判明したことだが、それは、マングローブ林をしきり、海岸に土手をきずいて、養魚をしているのであった。

湿地のある草っぱらに、ほうり出された。資料採集の器具といっしょに、とにかく待合室にはいる。今日の到着は知らせてあったが、もちろんお迎えが来ているとは予想していなかった。ある意味では非常事態のさなかにあるジャワで、それほど甘い考え方をしているが、さて、実際にボイとほうり出されてみると、いささか途方にくれた。野っぱらにフォードのボンコ

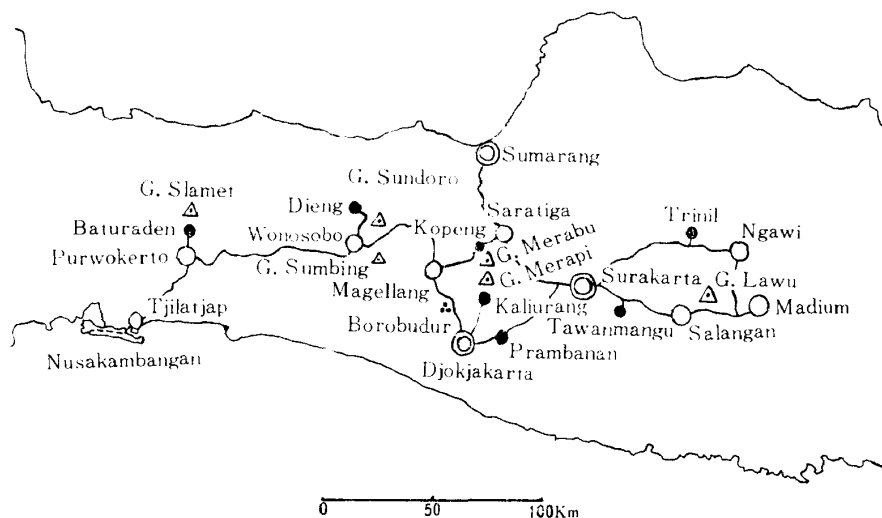


図2 中部ジャワ

ツが野ざらしになっている。ガラスの部分はみんななくなり、赤さびた金属部分が目立つ。ところが、この車にドライバーがついていて、動くのである。ただ法外の金額ではあったが、とにかくホテルに行く。4度目のホテルで、ようやく部屋がとれた。もちろん、デラックスでない。しかしジャワ気分が横溢している。中庭にはサテ（やきとり）売りがいて、よろしい。このホテルで4日ねばる。附近の“めし”やを食いあくる。水雞（かえる）など、安くてうまい。南京虫は、どういふことか、酒井君にだけはたからなかった。この Hotel Tjiremoji はなかなかの傑作であった。Police にあいさつに行く。署長が面会する。これもアメリカで仕込まれ、東京に3日泊ったという。《お話はよくわかった。省のお客ならば、それで旅行し、調査されることに異存はない。ただし、それは、その範囲での許可であって、それ以外の行動については許可できない。特に中部ジャワは美人が多いので、この点は重ねて注意されたい》と、にやにやしている。《いや私はもう老体であるので》という。《その老体がもっとも危険である》という。よほど《東京の夜》がお気にめしたらしい。このあたりから、私はジャカルタではわからなかった本当のジャワとぶつかりはじめた。

スマランの附近を歩いて資料をかせぐ。郊外には小高い丘がある。附近で林のなかをほじくっていると、農民が出てくる。子供たちが見物する。案内係が農民と話し合っ大いに笑っている。何かときいたら、また笑った。《この日本人は何であるか》《彼は京都大学の生物学の教授であって調査のために来たのである》《彼の年齢はいくつであるか》《およそ40歳と推定できる》《しからば戦時中は20歳前後であったと思われるが、調査とは名目だけのことであって、実際には、戦争のときに当地に進駐し、ジャワの女性とのあいだに残した第2世に面会に来たのではないか》これだけの豊かな想像力を、ただの農民が持っていること、それがジョークとして、日常に使われていること、それが私にはおどろくべきことに思われた。おなじ、マレー人であるとしても、これはマレー半島とはたいへんな差である。このようなパターンはタイにもなかった。カンボジアにもなかった。いく分はフィリピンにあったが、ジャバの方がはるかに洗練されている。この原因が文化的な伝統によることを、後日知らされた次第である。夜、ホテルの近くの映画

館にゆく。日本映画《夜の闘魚》が看板では Yuro になっていた。この町としては2流以下の館らしいが、それでもシートがみんな指定席になっている。日本の場末の映画館よりは、はるかに上品なムードである。

8月2日 トヨタのジープの新品を提供される。この車は昨夜おそくスラバヤ（Surabaya）から帰ったばかり、そして私たちに14日まで使用を予定され、そのあと、すぐに他の目的に使うという。国内の輸送事情が極度に切迫している証拠である。私たちの使用も、省としては、かなりの破格のものらしい。

スマランから南下してサラティガ（Saratiga）につく。ここから、同行の案内係がふたり乗り込んでくる。ひとりは最近までカリマンタン（Kalimantan）におり、ササヤップ川（S. Sasajap）の伐木事業所で働いていたという。ときどき日本語が出たり、そのときに日本人からもらったユカタを着たりする。私はパティックのサロンが気に入って、それを着用していると、妙な風景になる。もうひとりは、おっとりした、言葉数は少ないが親切な男、サラティガの署長を大政に、カリマンタンを小政にして、もうひとりを石松さんと呼ぶことにした。サラティガからクペン（Kopeng）にゆく。ここはムラブ山（G. Merabu）（3142m）の麓である。街道の両縁には、めずらしく糸杉が植えられている。ゴッホの画によく出てくるヒョロ長い樹のたたずまいと、そのバックに聳える火山の姿は、私には南伊やスペインの風景を思いおこさせた。住んでいる人たちの気質も、多分に通じるところがある。ムラブ火山は木曾の御岳のようであった。クペンには立派なホテルがあり、バンガローがある。周囲の林はふかく、ここで、はじめて中部ジャワの自然に接する。このあたり、溪流の水はすんでいて、東南アジアとしてはめずらしい。プラナリアがすんでいる。ジャワのプラナリアはめずらしくて、やがて報告は出るであろうが、地理的にも、特に重要なものと思う。今立君は土壤のサンプリングをはじめた。

峠を越えて、マグラン（Magellang）に出る。小都会である。華僑が多い。北行してパラカン（Parakan）を通り、スンドロ山（3,135m）、スンビン山（3,371m）とのあいだの峠をこえて、ウォノソボ（Wonosobo）の町についた。ゴミゴミしたバザーをはじめて見る。営林署長は親切だった。私たちをディエン（Dieng）

高原に案内するという。ジープは人と荷物でぎっしりになった。急坂をのぼり、高度をつめてゆく。土地の利用が行きとどいていて、ここではジャワの高地農業がみられる。山の斜面にはムシヨケギクの白い花が満開であった。ディエン高原は2,093 m。火山活動によって谷がせきとめられて出来た高原であるので、地形の上からは尾瀬ヶ原の形状にちかい。だだっ広い原の中央には湿原に囲まれた池があり、村落は原の周辺に点在している。ここには古いヒンズー寺院の遺跡が点在し、9世紀のものという。おそまつなゲスト・ハウスであったが、このディエン高原は私のジャワにおけるひとつの夢であった。十分に資料をとる。夜は寒かった。10℃というから、日本でならば大したことないが、小政、石松の両氏はふるえ上って、ひと夜まんじりともせず木炭のコンロにかじりついていて。恐らくは生れてはじめての寒さであったろう。ジャガイモ畑があり、そのあいだにソラマメが作られている。遠くにはナタネや、キャベツの畑がみえる。麦の穂が青い。村にはやたらに少年、少女が多かった。おいおいに判ったことは、このあたりは、桃源境とでもいう特殊な社会があり、ジャワのなかでも早婚であるという。男子は15歳、女子は13歳くらいで結婚するというから、子供の多いのも当然であろうし、生活程度に差のあることも考えられる。また急坂をウォノソボにくだる。先日の大政氏が私たちの行動を心配して、見に来てくれた。ディエンに行ったというので、安心して帰っていった。このあたり、ジャワでは難所のひとつなのであろう。

西へ走り、プルウォクルト (Purwo Kerto) に達する。スラムット山 (3,428 m) がそびえている。このあたり、ジャワの森林地帯の中心らしい。山腹の保養地バツラデン (Baturaden) のゲストハウスに泊る。このあたり、ナギ (Agathis) の植林がある。目下、林道を開いている途中ではあったが、立派な材である。ただし、材質は良くない。成育は早いらしいが。ここでも資料を集めるのにはこと欠かなかった。スラムット附近はジャワでは最多雨の地とのこと、山ビルが多いのには閉口する。附近には湯がわき出している。いささかの伝説があるやに聞いた。ここからスラムットの頂上までは2日の行程という。登頂したいのを我慢して、予定日をまもる。南行して、印度洋岸の港町チラチャップ (Tjilatjap) に達する。ひどい道で

あった。

ヌサカンバンガン

チラチャップの港には小さなタンカーが浮んでいた。印度洋側の唯一の港である。大戦のときは、ここが東洋のダンケルクであったという。日本空軍がここから撤退するオランダ軍を徹底的にやっつけたらしい。町の駅は、いまでも仮舎である。港は海峡に面していて、その対岸はヌサカンバンガン (Nusakambangan) 島である。海峡には、終戦後20年の今もなお船艦が3隻、座礁したまま赤さびている。

軍港でもあるので、港湾司令部に挨拶にゆく。若い海軍服の士官が、日本人とわかってから、急にうやうやしくなった。目の前にオランダとイギリスのフリゲート艦が沈んでいるのだから、これは正直なところ、こわもての感があった。

ジャワ本島はところどころに自然林が保護されている。それを私たちはたどって来たのであった。しかし熱帯の低地林はなかった。それがこのヌサカンバンガンの一角にある。全体としては淡路島の半ばくらいの面積であるが、その西半分は原生林のままであり、まだトラや、サイが野生し、寄生植物のラッフレンシアが花咲く、といったことを読んでいた私には、ここが夢の島でもあった。現実に行ってみると、そこは要塞地帯である。許可をもらって渡ってみると、何となく様子がおかしい。《ここには女がいない》などと石松氏がいいだす。小政氏はどうも緊張しているらしい。ジープ道のターミナルにつくと、兵営のようなものが現われた。何のことはない、ここはジャワ全島の流刑の地、それも、特に政治犯の徒刑の島であった。刑務所はこの島に7つあるという。その1つにつく。所長さんが出て来る。すこしも暗いところのない、でっぴりしたオヤジである。《日本人がこんなところまで来るとは思わなかった》と、お愛想のような、本心のような、とにかく、悦んでいることだけは確かであった。家族とも仲良くなる。

さて、原始林地帯への道程が大変なことになった。ゾロゾロと集合したのが15人、うち、日本人2人、警官が10人と、囚人が3名。ゴムのプランテーションをぬけていくと、いよいよ低地林になる。フタバガキ科の大木が出現し、下生えのあいだから、ミョウガ科の黄と赤の毒々しい原色の花などが現われてくる。しずま

りかえった林のなかに、溪流があって、滝がかかり、深い淵になっている。昼近くには開墾地に出た。キャツサパの畑がある。囚人はここで働いている。歩くのはあまり有難くないとみえて、このあたりから同行者の数が減ってきた。いったん海岸にでる。印度洋の波が砂丘の向うにうなっていた。ハマユウが咲いている砂丘を通りぬけ、それから東側の岬に向う。小さい川を渡渉し、岬から山の中にはいったところが、私たちの目的地であった。暑い。たいていの連中が落伍して、私と今立君と、その他には同行者がふたり。今まで気付かなかったが、そのふたり、いずれも囚人服である。下枝をはらうのに、山刀のデッカイのをつけている。このあたり、まったくの密林であって、すこしでも横道にそれると、見通しは全然ない。何のための警官の同行かわからないではないか。その囚人のひとりはいろいろ話しかけてくる。もう、この島に13年いる。もう3年すれば刑期をおわって出られる。刑務所のなかでは、こんなことがある、など。その男は林にくわしかった。《ラフフレッシュの花は白いのや、赤いのがあり、12月ごろに咲く、このあたりに多い》などといった。私たちの資料は、この日にたいへん豊富になった。休憩していると30分ほどおくらせて警官のひとりが、追い付いてきた。誰かに指図されたらしい。気の毒にイキを切らしている。昼食にしたら、さすがに囚人の2人はものすごい食欲であった。夕方近くまで、ゆっくり帰る。私はおくらせて、ひとりジャングルの中をあるいてみた。連日の強行軍でかなり神経がバテていたが、今日は暑い。溪流でマンディをする。たくさんエビが集まってきた。サルが樹の間がくれに見えた。もうすこし、私が若ければ、ターザンの真似ごとでもできたとおもう。あとで聞けば、ここにも10mくらいの蛇は出て来ることがあるという。このヌサカンバンガンに渡ったことが知れて、後日ジャカルタの在留邦人のジャワ通のなかまで評判になっていたとのこと。大したことではなかったが、ジャワでは、いちど可能であったことが、次の期には不可能になり、またその逆の場合もある。由来コンスタントな計画の立たないところが面白い。いよいよこのあたり地中海的である。

ソロ・ジョクジャカルタ

街道をもういちど逆行する。ウォノソボ、マグラ

ン、その他、各地の営林分署に挨拶をしながら行く。夕方ボロボドゥル (Borobudur) についた。生物学とは関係のないところではあるが、まず塔にのぼる。パンコックの寺院にくらべると、想像していたよりも小さかったが、はるかにムラピ山 (G. Merapi) を眺める風景は壮大である。このあたり、モクマオウ (Casuarina) の植林がみられる。

ムラピ山 (2,911 m) はすばらしい。山容には急斜面の露出地もあって、ゆるやかな噴煙が眺められる。いくたびか登りたくなった。山麓のカリウラン (Kaliurang) のバンガローでは花咲く庭に、周囲の山中では溪流にそって歩きつつ、熱帯の美しさに満足する。ケープタウンの郊外で、はじめて Kirstenbosch の植物園を訪れたときの感激に似たものがあつた。

ひと夜、プランバナナ (Prambanan) にワイヤンを見物。月明の夜、野外舞台が、ヒンズー寺院をバックにして設けられ、ガメランの打楽器を伴奏にして行なわれたラーマヤナの物語りに、インドネシアにはまだ私の知らない面があることを思い知らされた。私にはもちろん深いことは判らない。その劇の由来も、内容も、また音楽の構成分析もできない。しかし、この民衆芸術、その踊り手の大部分が、ジョクジャカルタ (Djakarta) のガジャマダ大学の子学生であるというこの舞踊劇は、私の予期していた田舎芝居ではなかった。日本のいろいろの伝統的な芸術、それに壮大さと、将来性を加えなければこの域には達しないと思われた。翌日、ジョクジャカルタ (略して Jogja) にガジャマダ大学を訪れる。Prof. Iso その他の社会学関係は酒井君にまかせ、Prof. Indrojo (昆虫学)、Prof. Jacob (洞穴生物) その他の人たちと語る。ここはジャカルタではない。ここにはジャワの伝統がある。大学そのものは貧弱であり、予算的にはジャカルタに及ばないとしても、この大学には自信がある。事実、学問上の業績からみて、立派な学問の伝統があることを、後日いろいろの方々から聞かされたことであつた。ジャカルタを東京とするならば、ここは京都大学であつた。

さらに旅をかさねる。ソロ (Solo) の町の東に聳えるラウー山 (G. Lawu) (3,265m) に行く。ここにも保養地タワンマングー (Tawangmangu) があり、サランガン (Salangan) がある。それらのゲストハウスに泊りマディウム (Madium)、ンガウィ (Ngawi) と、

東ジャワにはいる。ジャワ島は東部に向って dry になり、ついにはサバンナ気候が出現すると聞いた通り、このあたりは乾燥していた。甘蔗畑のつづき、竹林の多い丘陵地帯をソロ川の川床が侵蝕している。その川ぞいにだけ、河岸林がある。ジャワ猿人の化石の産地トリニール (Trinil) は、そんなところであった。あまりにも貧しい自然、河岸の土のあいだに深い穴がほってあって、村の少女がツボをかつぎ、その穴から水を運んでいた。資料集めに努力しながら、私はまたジャワの他の面を見せられた。8月13日、私たちは予定の通りスマランに帰着した。

こんどのスマランではいろいろの目にあった。省からの手配ができていたので、私たちは丘の上の特上のホテルに泊ることになった。そうすると、食堂はなかった。時間のたびに、ボーイに言いつけて食事を調製させた。夜はとうとう電燈がつかなかった。しかし、蚊も南京虫も出て来なかった。

翌日は省と、警察に挨拶にゆく。もうトヨタのジープは他の目的に使用されている。そして、ジャカルタに行く汽車も、航空機も、キャンセルされて、1週間以上待たねばならないという。私たちは、もう省のゲストではない。パザーにゆく。石松君がハイヤーとはなしあう。ところで、彼はおとなしすぎる。フィガロの如き人物が出現して、うまく話をまとめると、いささか法外の額ではあったが、ジョクジャに行くハイヤーがあった。夕暮れの路をとばし、もういちどこの中世の町へ、そこでホテルのボーイを口説いて、その日の夜行に乗りこんだ。ごまかしたのが当方か、ボーイか、ともかく、翌日の10時、ジャカルタについて、ホテルから電話すると、みんながあきれていた。ジャワを予定の通り旅行して、予定通りに帰って来るなど、奇跡だとのことである。しかも大学の先生がネー、というのである。

奇跡のあとが悪かった、インドネシア建国祭にぶつかってしまった。日本からは川島特使、花柳なにがし、それに日大ブラスバンドまでやってくる。大使館も忙しい。インドネシア側も忙しい。あきらめて、ボゴールに行く。今立君はパングランゴ山 (G. Pangrango) (3,022m) に登る。酒井君は農村をチョイと見てくるという。私はいろいろ考えてみた。行きたい

ところはたくさんあった。イリアン (Irian) 経由で帰国というルートも考えてみた。いずれも不可能であることが本当にわかるまで1週間かかった。私に欠けていたものは時間であった。ジャワ島以外を考えるのなら、それだけで2、3カ月、できることならば6カ月以上の予定を組まねばならないことが身にしみた。それだけの時間をかける価値のあることも。

このたびのジャワ旅行で、52地点の資料が得られた。まずは及第であったとは思うものの、あまりほめられた旅行ではなかった。ネシア語でネシア人と語り合うまでに半カ月以上かかっている。ひとつには崎山君に前半をオンブしたためではあっても、私としたことが、まことにシマらない話だと思った。もっと地についたやり方、たとえばジープが入手できない、航空機が使えないのならば、サイクリングするとか、ジャンクを利用するといった方法があったのではないか。まずは、インドネシアの1年生のこととして、ご海容いただきたい。

インドネシアの国情は、これからもいろいろと変遷することであろう。あるときは右に、あるときは左に、めまぐるしい転換もおこるかも知れない。しかし、この国民性と、この風土性の変らないかぎり、日本と、インドネシアのあいだには、つねに1本の糸が張られていて、その糸はたち切られることは考えられない。政治・経済の面での交代に一喜一憂することなく、少なくとも自然科学の面では、永続的の関係を継続させることが出来る。ボゴールの博物館から出版されている Treubia は、オランダ時代からの、生物関係の最も重要な雑誌であるが、それは国情の不安な現在でも刊行されており、つい最近にも、私の論文のゲラ刷りがやって来たところである。今後ともに、東南アジアの主要部分であるこの国との学術交流を盛んにして、ホーム・グラウンドとして、この国を眺めたいものである。

末尾ながら、今回の旅行について、一方ならずご配慮をいただいた斎藤大使、甲斐書記官、寺田書記官、カリマンタン開発の山本、丸山両氏、豊島中氏その他の方々に厚くお礼申し上げます。

東北タイの南部地域

水 野 浩 一

1 東北タイの南部地域

昨年度の調査期間中は、そのほとんどの時間をコーンケン県下の一部落に費したので、他の県を訪れる機会がなかった。それで今回は東北各地の村をみることを目的の一つに加えた。

東北地域といっても広い。その面積は70,000平方マイル、タイ国の約 $\frac{1}{3}$ 、日本の $\frac{1}{2}$ 弱の地域を占める。いうまでもなく、この地域の東と北はメコン川によってラオスと国境を接し、南はサンカムペーグとドーンクレグ山脈によってカンボジアと国境を接し、西においては、ベツチャブーンとドーンクプラヤージェン山脈によって中部タイから区切られる。

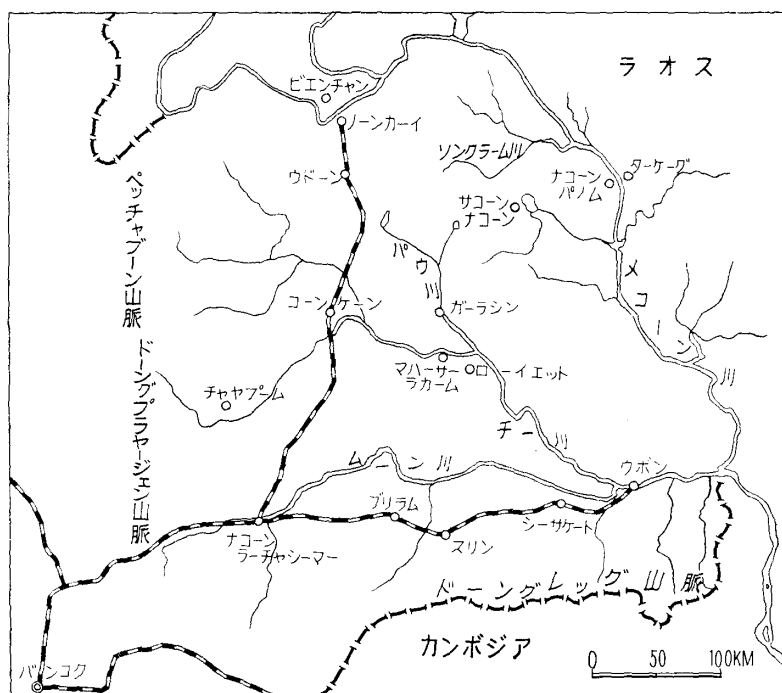
タイ国東北部は俗にコーラート高原とよばれるが、地形的にいて北と南の部分に分けることができよう。これを県別にみると、北側は東からナコンパノム、サコンナコン、ウドーン、ノンカイ、ローイの5県、南側はチー川流域のチャヤブーム、コーンケン、ガーラシン、マハーサーラカム、ローイエット、およびムーン川流域のナコンラーチャシーマー、ブリラム、スリン、シーサケート、ウボンの10県である。北側と南側の間には低い山地があり、ウボン県の東をメコン川に沿って北に走り、ガーラシン、コーンケンの北を西に向ってのびる。最も高い部分はガーラシン、ナコンパノム、サコンナコンの県境であり、600メートル位の山地を形成している。

高原北部はタイ国最大の湖ノ

ーングラハンを含み、そこに源を発するナムカム川はメコン川に注ぐ。その他おもな河川としてソングラムがある。北部の河川は比較的短かく50~100キロ位で、すべてメコン川に注いでいる。そしてメコン川増水期には逆流水が数10キロも溯るという。

高原南部の主要河川はムーン川とチー川である。ムーン川はドーンクプラヤージェン山脈にその源を発し、コーラート高原の水を集めて東に流れ、メコン川に注ぐ。支流チー川は高原の中央を曲折してウボン西方においてムーン川と合流する。パーウ川は東北二大湖ノーングハーンとノーングパンサグに発してチー川に注ぐ。高原の西部と北部は海拔130~200メートル、ウボン近郊で50メートルといわれるから、高原といっても実際には低い。ドーンクプラヤージェン山脈は800~1,300メートルの常緑樹林の山地で、最高峯は1,628メートルのカオラエームである。ドーンクレグ山脈は400メートル位の常緑樹林の山地で、高く700メートル位である。いずれの山脈も頂上が平で、外側に向って急峻な、内側に向って緩やかな傾斜を示す。

12月バンコクを立ち、約4週間の予定で高原南部の諸県をみてあるくことにした。しかし、バスによる交



東北タイ県庁所在地名

通が発達したとはいえ、ローカル線の不便さ、また1週5日制の官庁、県から村へ接近する手続のために結局5つの県をまわるにとどまった。すなわちガーラシン、マハーサーラカーム、ローイエット、ウボン、スリンの県である。

2 ガーラシン

バンコクからコーンケンまでの約450キロは、コーラートからノンカーイにいたるフレンドシップ・ロードの舗装が完成したため非常に便利で、大型長距離バス・ベンツで8時間半余りにすぎない。コーンケンからガーラシンまではオーストラリアの技術援助によるアスファルト舗装が敷かれつつあり、今年度中には完成の予定だという。交通機関としてはバスの他、乗合タクシーの便があり、比較的安い。コーンケンからガーラシンまで76キロ、1人15バーツである。

このフィーダー・ロードの伸展にともない、ガーラシンの西半分はコーンケンの市場圏内に入りつつある。ヤーグッタラードからはコーンケンに買物に来るし、コーンケンからはケナフの仲買者が入りこむ。今年は不作のため未成熟のケナフを売る農民が多い。カーイ・ポー・キオといい、青田売りならず、青畑売りである。1年のうちでも8月は経済的に苦しく、ケナフはまだ青い。商人は1ライの収穫200キロとみこんで、100キロ分の金額を収穫期の値で買う。刈入れ、レッティングには農民を雇うが、出来高制で、レッティングの終わったケナフ4束につき1バーツを支払う。そのほかサイ・ポオ・キオといって青畑を抵当に入れて金を借りる方法も多い。この場合レッティングまでの作業は農民もちである。泥棒は多く、80キロの大束が少しの間に消え失せるから、農民はたいてい出小屋で泊って番をするし、商人は防衛のためにピストルを所持する。

ガーラシンはパーウ州の流域にあり、6郡39村からなる小さな県である。総面積7,621平方キロ、総人口426,795人のうち農業人口は396,051人(93%)、1平方キロ当りの人口は56人、密度の低いウドンターニーへの移動が目につく。住民のほとんどはラオタイで、18世紀後半ビエンチャンから移住してきたらしい。

ガーラシンは昔から経済的にあまり豊かでなく、財政上の理由から隣のマハーサーラカームと合併したこ

ともあった。町の人口は11,054人、コーンケンの半分以下、商店の数も少なく、夜9時になるとひっそりとする。町が小さくなるにしたがって華僑色もうすれる。ガーラシンには華僑の学校はないし、また商店に漢字を使う割合も少なくなる。しかし商人のほとんどが華僑であることにはまちがいない。町には廟があるし、最近開いたガーラシン第一のホテルの経営者はハーフ・チャイニーズだし、町の中で第一の金持はやはり華僑であり、ナム・パーウ・ダム建設後の地価の上昇を見こして最近10,000ライの土地を買占めたのもかれである。

12月10日は憲法発布記念日であるが、タマサート・デイと称して、タマサート大学の同窓生が集まり、各県で催しがひらかれる。ただし、これは大学の創設者プリディーとは関係なく、親睦会にすぎない。その会でクチナーラーイとヤーグッタラードの郡長、その他

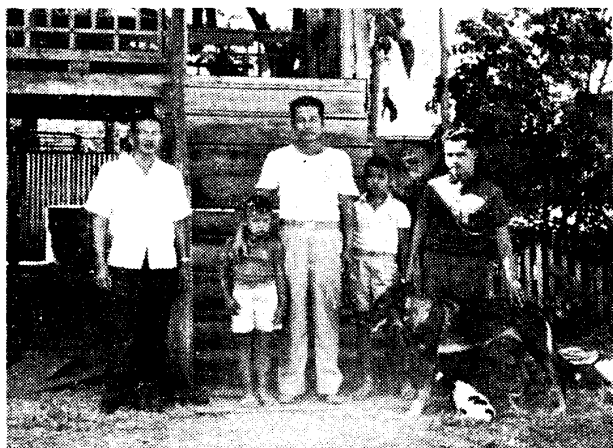


写真1 ヤーグッタラードの郡長(中央)

農村開発作業員と知り合い、2つの郡の村をみることにきめる。ついでながら、純粋のタイ人とはなにかと時々思わざるをえぬことにぶつかる。ヤーグッタラードの郡長は生肉こそ食わぬが、この土地で育った人である。しかし祖母は中国から来たという。

両郡とも農村開発地域に指定されており、作業員がはいりこんでいる。町自体は両者とも人口2,000~3,000、商店の数も20~30軒、旅館もない田舎町である。ヤーグッタラードはコーンケンに近いが、クチナーラーイはガーラシンの県庁所在地からさらに80キロ東北にあり、新聞もその日のうちには到着しない。市場から遠いためクチナーラーイでは換金作物の作付面積も少なく、現金収入も少ない。開発がおくられてい



写真2 木で葺いた屋根

る証拠に、未だ開拓の余地があるし、また農民の所有する農地の90%は単に管理権にとどまるノー・ソー・サームである。

クチナーラーイにはトタン屋根が少なく、木で葺いた屋根が多く、また傾斜もきつい。山ぎわなので雨が比較的多いのだろうか。事実東北一带旱魃だというのに、ここは稲の出来がわるくない。もっとも、それは単なる様式の問題なのかもしれない。住民のほとんどはプータイである。言葉はラオタイと類似しているが、異なるところもある。「なにををしているか」というのにラオタイはヘッド・ヤングといい、プータイはヘット・ペルーという。両族とも男が娘の家を訪れる風習がみいだされる。ラオタイはこの慣習をレン・サーウといい、プータイはイェン・サーウという。プータイの娘はラオタイよりずっと色が白く、肌が美しく、鼻の格好もよい。娘はより優雅で、訪れると、まずマットと水を持ってもてなし、部屋にひきさがって身をやつす。ラオタイと著しく異なる点は、男は結婚後妻の両親の家に住むのではなく、自分で家を建てて妻と住むし、また水田は父から息子に受継がれるのを常とし、娘にはやらぬことである。なおプータイの村にはたいてい4つか5つの有力な氏族があると報告されている。

プータイはクチナーラーイをはじめ、山をへだてた北の県ナコーンパノムとサコーンナコーンに住み、その数は約70,000人と推定されている。しかしこの民族の大部分はメコン川の東側に居住している。クチナーラーイのプータイの中には、ことに山麓のグチムグムガウには共産ゲリラに荷担する者があると噂され、農

村開発作業員を恐れさせている。クチナーラーイはセンシティブ・エリアのちょうど裏側にあるため、開発ことに道路の建設に力がいれられている。すなわち農村開発作業員の村落への浸透のほか、軍の移動開発隊、内務省の村落開発促進隊があって、クチナーラーイからムクダハーンへの道路建設を急いでいる。

3 マハーサーラカーム

ガーラシンを朝7時にたち、途中でバスを乗りかえてマハーサーラカームの町についたのは午後2時、130キロ余りだが時間がかかる。ホテルに飛込んで水を浴び、急いで県庁に向う。途中はアスファルトで舗装してないから、砂埃でシャツの襟や肩は真赤になる。口をすすがないと水を飲む気もしない。

マハーサーラカームは高原の中央、ラムチー川のあたりにあり、7郡52村の県である。総面積5,625平方キロのうち耕地面積2,495平方キロ、総人口499,373人のうち農業人口は459,476人(92%)である。1平方キロ当りの人口は87人で、人口密度は東北第1、他県への移動がはげしい。チー川流域の住民はほとんどラオタイ、コーンケーンの調査部落でおなじみの顔付に出くわす。

町の人口は15,680人、商店の数も700~1,000軒くらいとなり、やや町らしい。昨年度の県の収入は約5,000,000バーツ、ガーラシンの1,500,000バーツに比して約3倍弱を示す。しかし県の西の方はやはりコーンケーンの市場圏内にはいる。県庁所在地の町は行政的にはミュニシパリティとされ、都市には違いないが、農村人口はかなり多い。マハーサーラカームの町の70%は農民であり、15%が商人、15%が役人であるといわれる。それでも田舎の郡役所所在地の町に比べると農村人口はずっと少ない。さきのクチナーラーイの町では農民95%、3%が商人、2%が役人だといわれている。

以前、石井助教授にカッハボディーという言葉を教えてもらったことがある。タイ・中国語辞典をみると「男家長」と訳されている。土地の人に聞くと非常に裕福で、寝て暮らせることのできるような身分の人だという。結局、それが歴史的にどういうものかをつきとめずに終ってしまった。マハーサーラカームのカッハボディーは誰かと尋ねると10人挙げてくれた。第1位と第2位はともに父が中国人、母はタイ人で、30年

ほど前に中部からこの地方に進出し、現在はモーターサイクル、薬、家財道具を取扱っている。税金の高は年7~80,000バーツである。第3位と第4位も同じくハーフ・チャイニーズで、同じころこの町に到来し、衣類、薬、家具を商っている。第5位、第6位、第7位はタイ人であり、地方貴族の子孫であり、広い土地と家を所持している。貸間数は200~300位という。第8位、第9位はタイ人で食料品店を営んでいる。第10位は両親ともにベトナム人であり、50~60ライの土地を持ち、肉を商う。以上のうち第3位は市議員に選ばれている。精米所やケナフ工場の所有者などが数えられないのはどういうわけだろうか。カッハボディーも田舎の町に行くほど影がうすくなるのは当然である。

今年はどこを歩いてみても旱魃による不作で、水不足の悩みを聞かされた。籾米の1タン(20リットル)昨年8バーツであったのが、今年は12バーツ。しかし売る米はない。白米は1タンにつき昨年30バーツであったのが、今年は50バーツもする。ケナフはレツティング用の水がなく、刈取ったまま立てかけてある。河川のごく近くはポンプ給水で少しは助かるが、あとは全滅である。タンクと称する水溜も雨が降らなくてはなんともいたしかたはないし、セメントでかためてないから水漏りがする。それに規模の点からいってもとうていおっつかない。したがって青煙売りが当然余儀なくされるわけで、マハーサーラカームでは60%の農家が青いケナフを売っただろうと副知事はいう。しかしこれは少し多すぎる。見てまわった村からすると10%位のはずである。もっともこうしたことは時間をかけて詳細に調べてみないとわからない。

マハーサーラカームでは、県庁所在地の郡下の村を2,3訪れた。東北はどの村も白けた感じがして、時々やりきれぬ思いがする。しかし、ここでは婚姻、相続の慣習、農地所有の形態にかんしてコーンケーンの調査部落と同じであることがわかり、意を強くした。村の小学校の先生は現在30ライの土地を所有する。そのうち15ライは自分で買ったものであり、15ライは妻の両親から譲りうけている。妻には3人の姉妹と2人の兄弟がある、兄弟のうち1人は兵隊、1人は教員で、土地は譲り受けていない。姉2人はそれぞれ5,6ライの土地をもらった。末の妹は今両親とともに暮しており、この家族は50ライの土地をもつ。この50ライは

末の妹が受け継ぐことになるが、母の姉の孫娘に一部をわけられる傾向がみられる。家屋の配置の一例をあげると、中心に両親と末娘夫婦の家があり、その周囲に姉妹3人の家族がそれぞれ家屋を建てている。娘達の間には農地を平等にわけたという。ただこの例では息子夫婦1組も近くに小さな家を建て、また農地の分割にあずかっている。分割の時期は結婚後しばらくしてからであるという。

そうしてみると実際に分割されるまでの間、家屋を別にしながら、田畑を同じくする両親と娘夫婦のグループがあるはずである。このグループに名はないが、「ヘッド・ナム・カン」すなわち同じ田畑で生活している家屋の集り、といえはすぐ通じる。最初の村は戸数が多く、116軒、短時間の間に統計をとることは不可能だったが、少なくとも2例はすぐみいだせた。最後にまわった村は戸数20軒、ここではヘッド・ナム・カンのグループが2例あり、1組は両親と娘夫婦2軒、他の1組は両親と娘夫婦3軒、計7軒となる。残りの13軒はそれぞれ独立した家族である。ただしそのうち3軒は農地を全くもたない。かれらは村長である叔父の田畑を無償で借り、生活している。このような場合、土地の所有者をチャウ・コーグウ・ナ・リヤングという。

4 ローイエット

マハーサーラカームからローイエットまではバスで1時間である。パンコクからウボンに至る主要幹線が県の中央を東西に走るがアスファルト舗装はまだここまで伸びていない。

ローイエットはやはりラム・チー川のほとりにあり、人口密度はマハーサーラカームについて東北第2位である。総面積7,988平方キロのうち耕地面積3,098平方キロ、総人口668,193人のうち農業人口は620,665人(93%)である。1平方キロあたりの人口は87人で、他県への移動が目につく。マハーサーラカーム、ローイエットはともに東北でも最もよく開拓されているところであるが、土地所有の法的形態をみるとチャノードはほとんどなく、管理権にとどまるソー・コー・マンクおよびノー・ソー・ソーグウが約50%、売買権を認められているノー・ソー・サームが約50%を占め、土地整理がまだ十分には進んでいないことがしら

れる。

ローイエットでは村落開発作業員の世話で、タナットブリー県の村をみることにした。実際こうした作業員がなければ1人で村に入ることは不可能である。現在タイ全国で村落開拓地区に指定されている郡は48, そのうち東北が33郡, 南部が11郡, その他の地域はわずか4郡であり, 東北にかなりのウェイトがおかれていることが知られる。各郡には約30名の作業員が派遣されているが, その出身地区はまちまちである。だいたい半数は東北出身, 半数は中部その他であろう。東北と中部では言語, 食習慣がことなるため, 中部出身のものはしばしばマルアジアストメントをひきおこしやすい。役人意識に加えて中部出身の優越感をもって村人に接するから, 最初から失敗する。自己の地位の高さを誇示し, 相手を軽蔑するものは村人から信頼される人とはなりえない。かれはその地位の故に外面的な尊敬を受けることはできるが, 恐れられるのみである。村人はこうした人に対して本当のことはいわない。したがって調査村を選ぶ場合, 作業員の性格が非常に大きな要素になる。今になってみれば, この点昨年度の調査地の作業員, 通訳ともに申し分なかったと思う。したがってインタビューの結果にもそれだけ多くの信頼度をおくことができる。

村落開発隊の本部は内務省の村落開発局にあり, 東北部のセンターはウボンに, 南部のセンターはヤラーにおかれており, それぞれその地域の開発にたいして技術援助をおこなっている。作業員の実際の仕事は各村によってことなるが, 幹線から村への道路建設, 垣根や便所の普及, 給水設備, 小規模のダム工事, 養蚕の普及, 換金作物の普及などであり, 村人の自主性を尊重しつつこれらの仕事を通じて, 村人と政府の間の関係を良好にすることが主要な目的となっている。開発に際しての悩みの種は村が貧しいことであろう。便所の設備には1軒100パーツはある。道路拡張にはトラクターをやとわねばならぬが, 1軒20パーツの金がなかなか集まらない。金を集めるには村人の信仰心にうったえる方法がある。ある村では給水タンクを寺の境内に設けたが, 20,000パーツは政府の予算から, 残りの20,000パーツは村人の寄付によった。寄付は1軒4パーツをつのり, 不足分はタンブン・ガチンのときに寄進した金をふりあてたという。またある村では, 道路拡張の援助金は寺の講堂を新築するのにまわし,

そのかわり道路工事は村人があつまって労力を出し合っている。いずれの場合においても, 寺の住職がリーダーシップを発揮し, 村人の信仰心にうったえて結束に成功している。道路の必要性を感じても, ことそれが金の問題となると協力しにくい。それほど農村は貧しい。

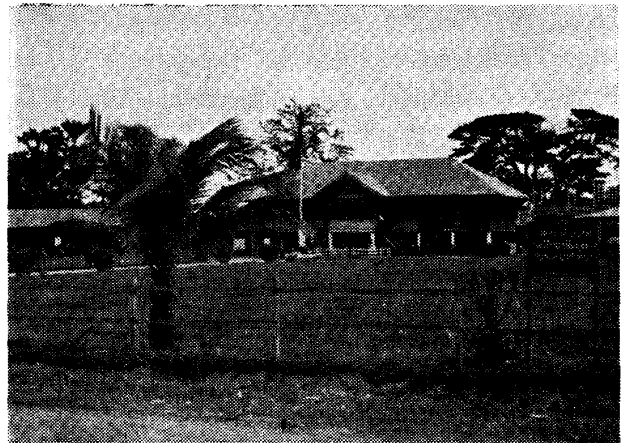


写真3 タワットブリーの郡役所

農民はみな貧しい。旱魃で不作の年も多い。だいたいどの村でも3%~10%は両親の土地にも依存せず, 自分でも土地を持たぬ家族があると思われる。かれらは売るべき青いケナフもない。タワットブリーで町の近くの村を訪れた。戸数は29軒でうち4軒は2組のヘッド・ナム・カンのグループをつくっている。村内の土地所有の最高は村長で100ライを所持し, 娘夫婦とともに小作人を雇って耕作している。農地所有の最低は10ライ。全くないものが4軒ある。そのうち1軒は小作である。水牛は自分で所有し, 粳種も自分でまかなう。収穫の15%を所有者に納めるが, 普通は小作料は50%である。他の1軒は農業労働者で, 4人暮らし, 1年に70タンの米を受けとるから, それでまかなえる。他の1軒は女手1人の4人暮らし, 娘をバンコクに働きに出し, 4月に1回米代を送らせて生活している。最後の1軒は7人暮らし, 農業労働者である。生活に困れば村人に物を乞うて, なんとか食いつないでいる。ガーラシンで訪れた村の戸数は510軒, そのうち50~100ライの所有者100軒, 20~50ライが300軒, 8~20ライが100軒, 全くないもの10軒となっている。土地のないものは米代をかせぐのに走りまわらなければならない。時にはアヒルを飼って卵をうる。時には

魚を捕って売りあるく。ときには仲買人のようなことをする。資金がないから安定した仲買人ではなくて、使い走りに近い。ある者が田の魚を売りたい場合、その相手をみつけるのに飛び歩いて、手数料をもらう。こうした方法をイャブ・タウ・カーイといって村の中には割合多い。

ローイエットではタワットブリーから東北へ80キロあまりのところにあるポントーング郡を訪れた。ここはちょうどガーラシンのクチナーライ郡の南側にあたり、山がちの郡である。新聞は2、3日おくれて到着する。ここにはまだ村落開発作業員は入っていない。そういうところにはまず内務省の村落開発促進隊が送られ、文字通り道を開く。ポントーングでは、促進隊とアメリカの建設部隊とが協力して郡役所所在地から東へ30キロの道路工事に着手しはじめていた。予算は5,000,000 バーツで期間は1年である。この道路が出来れば、クチナーライやムクダハーンへの交通がより便利になるはずである。今は道らしい道はなく、バスが通るどころか、牛車がやっと通れる程度である。

5 ウボンラーチャターニー

ポントーングを南に30キロ下って、セーラブームからウボン行きのバスに乗る。ウボンまで140キロの道路はまだ完全に舗装されていない。相変らずラテライトの赤土が続く。

ウボンラーチャターニーは東北諸県の中でも一番広い。ムーン川とチー川の合流点にあり、18郡193村からなる。総面積22,614平方キロ、総人口1,130,712人のうち農業人口は990,029人(88%)、1平方キロ当りの人口は50人である。

ウボンの町の人口は27,092人。町の人口構成はマハーサーラカムとだいたい同じであろう。商店のほとんどが中国人ないしハーフ・チャイニーズであることはいうまでもない。純粹のタイ人は5%にも及ばず、そのほとんどは小売店である。ハーフ・チャイニーズはタイの国籍をもつし、中には漢字の読めぬものもあり、文化様式としてはタイ化しつつある。しかし経済的利害ということになると中国人と同一視する。顧客に対してはタイ人として通用し、経済界においては中国人として通用する。タイ人とハーフ・チャイニーズの小売店を比較すると、ハーフ・チャイニーズの方が

有利である。品物を安く仕入れることが出来るし、安く売ることができるからである。客は安い店に集まる。純粹であろうとハーフ・ブラッドであろうと華僑は華僑として一つのカテゴリーであり、純粹のタイ人による商業の発展をさまたげていることはやはり事実であろう。タイ人の中にも店を經營するものはあるし、村の中でさえ小型の精米所を經營する者もあり、また仲買人として生計をたてるものもある。しかしかれらが町に出て華僑と競争することはできない。子供の職業として役人、警察官、先生を望む理由もこうしたところにあるのであろう。

ウボンラーチャターニーではメコン川の見えるケマラート郡とスウエイ族がいるといわれるデッドウドム郡の村を見ることにきめる。ケマラートはウボンから70キロ北に上り、右折して80キロ東に進んだところにある。1日2回バスの便があり、所要時間は4時間半、ラテライトの道路が低い山を通りぬけてメコン川岸まで達している。町に着いたのは夕方5時半、郡の教育部長の家を見つけて世話になることにする。

郡役所所在地の町は人口3,662人、店の数は50軒ばかり、税収は年7,453バーツというから、全くの田舎町である。郡役所の役人が32人、先生が250人、警官30人、それに加えて国境警察官40人と軍の移動開發隊が80人ばかり、その他わずかの商人をのぞくとすべて農民である。田畑の90%位が管理権にとどまるソー・コー・ヌンがないしノー・ソー・ソーグゥに属することはクチナーライの場合と同じである。

郡役所はメコン川の河岸にあり、小さいながら税関があり、入国管理局の役人が2人居る。2キロほどの川中の対岸はラオス、上流にはムクダハーン近くの岸が見える。川の中程には柵柱がみえ国境線を示している。舟が2、3隻みえ魚を捕っているらしい。タイ側の人間も仲よく出かける。対岸には町がないから、ラオス人は毎日タイ側のケマラートまで買物に来る。その数は1日平均2、30人位に達する。ラオスからは水牛皮が送られてくるが、これはタイ側の商人が一括してバンコクに送る。タイ側の住民は民族的にはラオスの住民と同じであり、互に結婚することもしばしばみだされる。

町から2キロ離れた川岸に170軒ばかりの村がある。どの家もタイの旗を立てている点は国境ぞいの村なら

ではであろう。村長の言からは政治教育がかなり徹底していることが知られる。新聞はもちろんないが、ラジオは20台位あるという。住民はラオタイであり、昔ビエンチャンから来たと伝えられる。そこで早速家族形態の調査を聞く。170軒のうち50軒は独立した核家族、他の50軒は両親と娘夫婦1組からなる大家族、他の70軒は30のヘッド・ナム・カンのグループに分かれている。30組のうち20組は娘夫婦の家族1世帯を含み、他の10組は娘夫婦の家族を2世帯含むというのがだいたいの統計である。水田の所有の形態は40～50ライ2軒、30～40ライ3軒、20～50ライ5軒、10～20ライ90軒、1～10ライ50軒、水田はないが畑地のみが20軒となっている。この村の北にあたるチャスマーン郡には共産ゲリラがひそむと噂される。

スウエイ族がいるというデッドウドムは、県の南の端、ケマラートから200キロの道程である。しかもス



写真4 デッドウドムからブーラベに向うトラック、ニッサン

ウエイ族のいるスユ村は郡役所の所在地から80キロの山道を登ったカンボジア国境附近にある。1日1回のトラック便は40キロ離れたブーラベ村まで入るが、そこから先は歩かねばならない。スウエイ族はスリンの東からシーサケートの南、ウボンの南、さらに国境山脈をこえてカンボジア側の山麓に住む民族で、言語的にはモン・クメール系統に属し、人種的にはインドネシア——ベドイド型の顔付を示すといわれる。スウエイ族をみたさに遠隔の地をいとわず先発することにした。郡長から村長宛の紹介状を持ち、今度こそは1人旅である。ブーラベからスユを経てゲーンゲトーンを廻りブーラベに戻るまで、通過村ごとに道案内を

頼む。この旅で得た経験は3つ。すなわち僻地にもかかわらず、どこにいてもマラリア予防センターの作業員が入っており、家屋には全部番号がついている。第2に国境線近くの村々は、その大小にかかわらず、立派な校舎をもっているが、内にはいると全く悪い。第3に道路の不便さにひきかえ、無線によるコミュニケーション網が発達しており、各村（タンボン）のガムナンないし校長は毎日きまって郡役所からのニュースを聞き、また送信機をもそなえている。郡長からの紹介状がなければ、宿泊を頼むどころか、すぐに報告されるはめにおちいる。治安状態は案外よくゆきとどいている。

この地域は、スウエイの他、クメール、ラオタイの村がいりまじっている。スユに向う途中、ラオタイの村に遭遇したので、その風習について聞いたが、コーンケーン、マハーサーラカム、ローイエット、ケマラートのラオタイと同様である。この村は戸数137軒、そのうち90軒は独立した核家族ないし大家族である。残りの47軒は20のヘッド・ナム・カンのグループを形成している。20組のうち13組は両親と娘夫婦1世帯、7組は両親と娘夫婦2世帯がひとつのグループをなす。

ブーラベを朝7時に出て10時間砂地の山道を歩いてスユの村についたのは夕方5時、まったく疲れきって十分間いただきますこともできず翌朝再びブーラベに戻った。男は結婚後妻の両親の家にしばらく住む点はラオタイと同様である。しかしその後、男は自分で家を建て、また土地を探して自分で生計の道をひらく。兄弟姉妹は順次両親のもとをはなれ、最後に残った者が両親とともに住む。それは息子かもしれぬし、娘かもしれぬ。親族名称にかんしては、兄はアイ、姉はサーイ、弟と妹はセームという。父はノ、母はメイである。父の兄はアイ・ノ、父の姉はサーイ・カン・ノ、父の弟はセーム・カン・ノ、父の妹はセーム・カモール・カン・ノであり、母方も同様である。母の兄アイ・カン・メイ、母の姉サーイ・ア・メイ、母の弟セーム・ア・メイ、母の妹セーム・ア・メイである。祖父母はノ・タウとメイ・タウという。

6 ス リ ン

スリンはムーン川の南、カンボジアと接して、ブリラムの東にあり、8郡76村からなる県である。総面積

8,814平方キロのうち耕地面積2,719平方キロ、総人口581,732人のうち農業人口528,474人(91%)、1平方キロあたりの人口は66人で、ブリラムへの移動が目につく。

スリンにもスウエイが居るというので、プーラベを立ち、デッドウドム、ウボンを経て汽車でスリンに向う。トラック、バス、汽車に乗りついで、所要時間15時間、スリンに着いたのは夜9時であった。ウボンからコーラートに到る国境山麓の道路はまだ完成していないから、鉄道以外に交通の便はない。

スリンでは県庁の教育局の役人の案内でスウエイの村とクメールの村をひとつずつみることにした。時間に迫られた強行軍であったが、ジープの便があったため、とにかく予定の場所を訪れえた。スウエイの村は県庁から北へ80キロ上ったグラボー村といい、戸数は170軒である。スウエイの男達は酒好きである。1週間も調査すれば酒代に200バーツ位ははまねばならないだろう。顔は角ばって、頬骨と顎の骨がよく発達している。言葉は彼らの言葉を話すが、クメール、ラオタイの言葉もしゃべり、標準語もまたうまい。相続についてはラオタイと異なる。5人の子供があれば、末子が両親の世話をすることはスウエイと同じである。両親が水田を2カ所もっていたとすれば、1カ所は末子が受け継ぎ、他の1カ所は他の4人の子供に平等に分ける。もし1カ所しかなかったとすれば、他の4人の子供には分けない。婚姻後は妻の両親としばらく生活を共にするが、適当な時期に自分で家を建てて移る。その際妻の両親が援助することはありうる。親族名称にかんしては自己の兄弟姉妹はスウエイと同じで、兄はアイ、姉はサーイ、弟と妹はセームである。父はヌ、母はメという。父母の兄弟姉妹は父方、母方ともに同じで、叔父はルンク、叔母はパー、伯父はギー、伯母はペという。ルンクとパーはラオタイと同じ言葉である。祖父母はアゴイン、曾祖父母はアゴイン・トゥウッド、子供はゴーン、孫はチャウといい、息子の子も娘の子も同じである。タイ人によればスウエイのあるものは母系だと報告されているが、本当にそういう村があるのだろうか。

訪れたクメールの村は町から2キロほどのところにある。古老に聞いたところをまとめてみるとラオタイにかなり類似している。男は水田を受け継がない。田

は妻の両親からくる。もし3人の娘と2人の息子があれば娘3人は平等に田を譲り受けるが、息子は分けまゑにあずからぬ。そして末娘が両親の世話をみるから家屋は末娘のものとなり、両親の田も彼女のものとなる。婚姻後はやはり妻の両親とともにしばらく生活する。ただラオタイと異り、はっきりしている点は、分出したときに田畑を分けるという。とするとヘッド・ナム・カンの例はないことになる。父はアウ、母はメーという。父母の兄弟姉妹は父方、母方の区別なく、それぞれ順にアウ・トム、アウ・トイ、メー・トム、メー・トイという。祖父母はターとヤーイ、曾祖父母はター・トードとヤイ・トード、その前の世代ではター・ロードとヤイ・ロードという。兄はボン・プロ、弟はバ・オーン・プロ、姉はボン・スライ、妹はバ・オーン・スライである。子供はゴーン、以下世代が下るに従って、チャウ、チャウ・トード、チャウ・ロード、チャウ・リアとなる。

7 おわりに

以上、とりとめのない記述になったが、社会的慣習だけについてみてみるとつぎのようである。ガーラシン、サコーンナコーン、ナコーンパノムにかけて住むプータイは父系的色彩が濃厚である。ガーラシンにはプータイ同様タイ系民族としてヨーが住む。この社会組織はラオタイよりはプータイに類似している。ラオタイはチー川の両側をはじめ東北に広く分布している。かれらの社会は、妻方居住制のために、母系的な要素がみいだされる。そして一時的ではあるが、ヘッド・ナム・カンのグループがしばしばみられる。こうしたグループはプータイ、ヨー、クメール、スウエイの間ではなさそうである。クメールの社会的慣習はラオタイに類似しているが、ヘッド・ナム・カンのグループはない。ただし訪れた村はラオ化したクメールなのかもしれない。スウエイはラオタイと異なり、末子が両親の世話をする傾向にある。スウエイといっても場所によりかなり異なるようであり、あるものにはラオ化し、あるものはクメール化しているといわれる。純粋なスウエイとはどんな文化の保持者なのだろうか。はたして母系制の民族というのだろうか興味をそそる問題である。

(1966年2月、コンケンにて)

タイ国における山地民問題と Tribal Research Centre

飯 島 茂

1

Bangkok の郊外から四方を見わたすと、だれもがタイ国とはなんと平坦な国だと思うことだろう。水田は足もとからはじまり、地平線のかなたにまで果てしなく続く。このように Chao Phraya 川のはん濫原には山地民の住みかになるような山岳地帯はまったくといってよいほど見当らない。

ところがタイ国北部は Chiangmai や Lampang のような比較的大規模な盆地を除くと、ほとんどが山岳地帯でしめられていて、そこにはかなりの数の山地民が住んでいる。Gordon Young の推定によると、1960 年においては山地民の総人口約 217,000 人にのぼるといふ。その山地民を大別すると Sino-Tibet 系のものと、Austroasia 系のものとに大別されているが、Gordon Young の概算によるとその内訳は表 1 のとおりである。



写真 1 元気のよい Meo 族の少年

表 1 北部タイにおける山地民の人口

民 族 集 団	人 口*
Sino-Tibetans**	
Sinitics	
Haw	600
Tibeto-Burmans	
Akha	25,200
Lisu	17,300
Lahu-Nyi	9,200
Lahu-Na	3,000
Lahu-Shehleh	2,200
Lahu-Shi	650
Skaw Karen	45,000
P'wo Karen	24,500
B'ghwe Karen	1,300
Taungthu	600
Blue Meo	26,400
White Meo	19,200
Gua M'ba Meo	200
Yao	10,200
Austroasiatics	
Kha Htin	18,900
Kha Mu	3,300
Kha Haw	196
Lawa	9,000
Phi Tong Luang	100
Total	217,000

* 数字は Young (1962) p. 85 参照

** この民族集団の分類ははなはだ便宜的なものである。Karen 族は慣行にしたがって Tibeto-Burmans の中に分類したが、Meo-Yao のグループにいたっては分類上の位置はまだはっきりしない。また、Austroasiatics がはたして Sino-Tibetans に対応できるような集団なのかどうかということもいぜんとして問題にされている。

以上のような山地民の推定人口はきわめて大掴みなものであることはいうまでもない。タイ国政府も内務省公共福祉局山地民課を中心に国境警察などもくわわり、出先機関が山地民の実数を正確に把握しようと努力をかさねているが、正確な人口調査はかれらの居住地が極度に交通が不便なうえに、定着性にとぼしいのでなかなか困難なように思われる。くわえて、山地民

のなかでも平地民と接触をかさねている間に、北タイ文化もしくは Bangkok を中心として近年へき地にも急速に普及しつつあるタイ文化をかなりの程度摂取して、すでに“タイ人”になってしまった連中を含めると、前掲の推定人口は人によっては倍増するのではないかという。

2

ところで、これらの山地民がタイ国にとってどのような問題をもたらしているであろうか。大綱みにいって、それは焼畑と国民形成の2問題に要約されるであろう。

(1) 焼 畑

焼畑農業に従事する山地民の状態とその定着化の傾向については、Karen 族を中心に拙稿「タイ国北部における山地カレン族の文化変容一予報1—」『東南アジア研究』第2巻第4号、pp. 2~19 と“Cultural Change among the Hill Karens in Northern Thailand,” *Asian Survey*, Vol. V, No. 8, pp. 417~23 にすでに発表してあるので、ここではできるだけ重複を避けることにしよう。

焼畑が無制限におこなわれた場合には、この国における森林資源に破壊的影響が与えられる。またそれは同時に、タイ国の経済に重要な意味を持っている水田稲作をささえている Chao Phraya 川水系の源流地帯を荒廃させることにもなる。

また、いま一つの問題としては、焼畑農業の性質上それに従事する山地民の村落にはどうしても定着性がともなわず、時には国境付近で微妙な治安問題をもたらすこともあり、さらにかれらによって栽培されている麻薬の原料であるケシの取締りも困難な現状である。

(2) 国民形成

タイ国にとって国民形成の問題はなにも山地民に限ったことではない。平地の住民に関しても、東北地方の Lao-Thai 系の住民や南部地方の Islam 系住民のことも国家統合の問題として程度の差こそあっても中央政府にとっては頭痛の種のように思われる。しかし、これらの問題はいずれにせよ平地のことなので中央政府も比較的処理しやすく、すでに一部では交通、通信の整備や教育投資の拡充などによって、ちやくちやくと国民形成がすすんでいるようである。

それに対して、山地民に関しては住んでいる場所が交通のきわめて不便な山岳地帯なので、国勢調査などによっても人口がたいへん把握しにくい。そのうえ、学校一つ建てるにしても、山岳地帯は人口が希薄なために、1人あたりの投資が極度に高くなり、教育の普及を困難にしている。また、タイ国に限ったことではないが、へき地に質の高い教師を確保するのも容易な仕事ではないのである。現在までのところ、国境警察の多大な努力によって、隊員の駐屯する山間へき地の村では隊員みずからが先生になって、寺子屋式の学校が開かれている。そこでは標準タイ語を中心として、山地民などに初等教育がほどこされている。

また、場所によっては Thai 人なみの学校もすでに開校されている。たとえば、現在わたくしが調査をしている Mae Sarieng の谷にある Karen 族の村では、5年ほど前から小学校が開かれた。昨年までは竹で作り、木の葉でふいたみずぼらしい小屋で授業がおこなわれていたが、去年の末に半年ぶりでその村にもどってみると、チークで作られた立派な校舎ができていた。ここでは2人の先生のもとに、22名の生徒が上級と下級の2クラスに分かれて、つぎのようなカリキュラムのもとに授業がおこなわれている。

表2 小学校のカリキュラム

課 目	回 数	時 間 数
公 民	3	6
タ イ 語	6	9
算 数	3	3
理 科	2	3
職 業	3	3
体 育	3	3
計	20	27

以上のカリキュラムを見てもわかるように、ここの Karen 族の小学生は一般 Thai 人の小学生とほとんど同じ内容の授業を受けている。授業の3分の1が標準タイ語の勉強にあてられているだけではなく、校内ではほかの場合でも標準タイ語が使用されることを要求されている。

この限りでは国民形成の第一歩である標準語の普及がこのようなへき地にまでおよんできたのである。しかし、問題の本質はむしろ小学校卒業後にあるのでは



写真2 平地 Karen の村には北 Thai 人の行商人がときたまやってくる。

ないだろうか。すなわち、調査をしている村は Karen 族の村としてはかなりの程度に平地民化が進んだ村落であって（拙稿「タイ国西北部におけるカレン族の平地民化」『東南アジア研究』第3巻第5号参照）、山地民のなかではもっとも順調に国民形成の流れに吸収されやすいように思われる。ところがここにはまだ初等教育のアフター・ケアの問題が残っているのである。これはなにもタイ国における山地民に限ったことではなく、中国大陆においてさかんにおこなわれている識字運動にも同様な問題があるといわれている。それは学校教育がおこなわれたのちに、どのようにして習得した言語を日常生活のなかで維持するかということである。

Mae Sarieng の町までは200キロメートルの路をとって、毎日トラックが Chiangmai から1日遅れの新聞をはこんでくる。しかし、Mae Sarieng からわずか2キロメートルしか離れていないこの村には1通の新聞すらとどかないのである。その理由はここの村の Karen 族が貧困であるということもあるだろうが、同時に4年間の初等教育だけでは、Chiangmai で印刷さ

れる新聞の内容が“むずかし”すぎるからかも知れない。もっとも、この村で学校教育を受けた Karen 族がまだほとんど成年に達していないという事実もこのことに関係があるのだろうが、たとえかれらが成年に達して、新聞をとれるような経済力を持ったとしても、その頃までに識字能力が新聞を理解できるまでに高まるか、少なくとも現状を維持できるかはいささか疑わしい。

ラジオ放送に関しては文字を媒介としないだけに、へき地の住民に無理なく吸収されるので、国民形成に直接役立つように考えられている。しかしながら、この村には電気がないので、ラジオを買うとするとトランジスターの受信機が必要となる。そうすると、中古の物でもここの Karen の数カ月の収入をあてなければ購入することはできないのである。ちなみに、村におけるラジオの台数をあげると、全村48戸中わずかに3戸だけが旧式のトランジスター・ラジオを持っているだけである。

3

中央政府の懸命な努力にもかかわらず、山地民問題はこれまで述べてきたようにいろいろな困難をとまなっている。

タイ国政府は本格的な山地民対策の手初めとして、1958年12月19日に布告した政令第37号により麻薬の原料になるケシの栽培を禁止するとともに、山地民問題解決に緊急を要することを強調した。さらに1959年には Tak 県の Doi Musser, Chiangmai 県の Doi Chiangdao に山地民の福祉施設としての Nikhom を設置することが閣議で決定された。そして1964年には内務省公共福祉局に山地民課が新設され、コーネル大学で農村社会学を専攻した Mr. Prasit Dhitsavath が初代課長に就任した。

それに先だち、政府は山地民問題の問題点を把握するために、公共福祉局に命じて山地民の社会・経済調査をおこなわせた。

1961年9月から10月にかけてはまず政府の各機関から出向してきた調査員の訓練がおこなわれ、調査は同年10月から翌62年2月にかけての雨のほとんど降らな

- 1) 現在では Chiangrai にいま一つの Nikhom, また Mae Ho にはそれに類似の設備ができて、山地民の福祉にあたっている。

い冬季に実施された。かくして1962年9月には公共福祉局から“Report on the Socio-Economic Survey of the Hill Tribes in Northern Thailand”というタイプ印刷で112ページにわたる英文報告書が出版された。

この報告書は第1部と第2部にわかれていて、第1部は山地民の現状に関する総括的分析、第2部はそれにもとづく勧告にあてられている。この勧告は政治、行政、福祉の各方面にわたって述べられていて、その一環としてタイ国北部に Tribal Research Centre を設立することをつぎのように勧告した。

“In order to facilitate effective work in connection with the tribal minorities in this country, social studies should be inaugurated and co-ordinated. We speak in this context primarily of applied research. That means the studies should have the practical purpose of preparing a basis for formulating realistic plans directed towards the improving of social and economic conditions. In the second place, they may contribute to increasing knowledge about the people of the region, their ways of life and their history. We may mention in passing that the one can not easily be separated from the other.

We recommend that a Tribal Research Centre should be set up in northern Thailand, preferably in the town of Chiangmai, on account of its central location.

Any possible association of the Centre with the University of Chiangmai (which is about to be inaugurated) may be considered. Co-operation with other National Universities or with the Siam Society should equally be considered. Possible assistance of international organization may be investigated.

The Tribal Research Centre should serve as a : ———

- (a) centre for studies in applied anthropology.
- (b) documentation centre for relevant problems concerning the region.
- (c) briefing and training centre for tribal officers, extension workers, administrators, educators, specialists in agriculture, livestock, transport and

marketing, being concerned with development activities among hill tribes.

(d) centre for providing advisory services to the Government on hill peoples problems.

It is plausible to conceive that this Centre may be of value to neighbouring countries with similar hill tribes problems. At a later stage, the Centre might well be utilized for co-ordinating regional efforts in regards to the hill tribes. (前掲の報告書 pp.100~101)

この勧告にもとづき、1965年10月21日に内務省公共福祉局が Chiangmai 大学の協力をえて、同大学のキャンパスの西隅に Tribal Research Centre を設立した。政府はこれにたいして、本館建設に 300,000 パーツ (約 5,400,000 円)、官舎建設に 120,000 パーツ (2,160,000円) を支出した。



写真3 Chiangmai 大学の美しいキャンパスに新設された Tribal Research Centre

本館の1階は図書室、陳列室、教室にわけられている。図書室は開所間もなかったので、まだ書籍や参考文献などほとんどそろっていないけれども、将来はタイ国を中心とする大陸部東南アジア関係の研究資料が拡充されることが期待されている。とりわけ、人類学、社会学、山地農業を中心に文献収集がおこなわれるという。また教室は政府機関の山地民担当官のトレーニングなどに使用されている。

本館の2階は所長室、事務室、外国人アドヴァイザーや山地民担当官の研究室、写真用暗室、エアー・コンディショニング付きの貯蔵室などがある。

また本館の周囲には近い将来に山地民の家屋の見本を各民族集団ごとに、何種類か建設することが計画されている。

この Tribal Research Centre にたいしては外国政府も深い関心を示している。とりわけ、オーストラリア政府は SEATO の関係もあって力をいれ、すでにジープ12台、トラック1台、それに第一線の社会人類学者で New Guinea 研究で有名な Professor William R. Geddes (現 Sydney 大学人類学部長) を同センターに送った。Professor Geddes は1カ年半タイ国北部に滞在し、山地民調査の技術をタイ国側の担当官に指導した。同教授は昨年帰国し、後任には弟子の Mr. Peter Hinton がきて、Tribal Research Centre のアドバイザーとして働いている。

なお、このほかにも外国から援助が寄せられている。たとえば、アメリカやイギリスは書籍、テープ・レコーダー、ムービー・カメラなどを寄付した。

いずれにせよ、Tribal Research Centre は発足したてなので、いろいろと設備が不備のようであるが、所長の Mr. Wanat Phruksasri のイニシアティブのもとに着実に活動が開始されたように思われる。すでに第1回の山地民担当官のトレーニング・コースもおこなわれ、国境警察、公衆衛生局、初等教育局、畜産局、米穀局、農業局、土地局、国防省、国家安全中央司令部などから30名もの受講者を集めた。

またアドバイザーの Mr. P. Hinton の発案で第1回山地民研究者セミナーが3月18日に開かれ、内外の人類学者、言語学者が集まり、熱心な研究討議がおこなわれた。

このように、Tribal Research Centre は地道に山地民関係の研究と訓練の統合機関としての機能を発揮し始めた。山地民問題で解決しなければならないことは山積しているけれども、この Tribal Research Centre の発展はひとえに山地民の研究を蓄積しながらいかに若い人材を育てうるかにかかっているようだ。

参 考 文 献

Dept. of Public Welfare, Ministry of Interior. *Report on the Socio-Economic Survey of the Hill Tribe in Northern Thailand*. Bangkok: 1962.

Young, Gordon. *The Hill Tribes of Northern Thailand*. Bangkok: 1962.

(1966年4月、メー・サリエンにて)

Applied Scientific Research Corporation of Thailand の 動向について

四 手 井 綱 英
石 井 米 雄

1

バンコクの町から、パホンヨーティン街道を北上して約20キロ。つい先ごろまで、車窓の風物を楽しむ旅行客の目を惹く建物といえば、カセーサート大学の本館ぐらいいしかなかったバンケン(バンコク)の界限は、National Research Council の新庁舎が完成してからというもの、にわかに活況を呈しはじめています。

NRC の全館冷房のスマートな近代建築の右手には、Documentation Center の白亜の壁が南国の日差を浴びて輝き、その背後には、飛行機の格納庫を思わせるような Technological Research Institute の heavy-duty workshop が、目下各試験器機の据付けにいそがしい。そして NRC 本館左手の空地には近代設備のとのつた化学分析、物理量測定を行なう実験施設が本年中に完成を見ようとしている。

NRC と言えば、われわれ外国人研究者にとっては、タイ国における研究活動の調整機関という面ばかりが表に立って見えるが、この機関が故サリット元帥のお声がかかりで1959年に発足したときには、各分野の既存研究の Co-ordinator というだけではなく、進んで将来のタイ国科学研究の中核となる役割を課せられていたのであった。今日バンケンの景観に新しい色どりをそえつつある「科学研究センター」誕生の背景には、NRC 発足後過去数年間にわたる関係者の地道な努力があったのである。

2

1960年、タイ国政府は国連の Technical Assistance Administration に対し、「応用科学研究の開発、振興、企画立案の方策について助言を行なう専門家」1名の派遣を要請した。この要請に応え、The Common-

wealth Scientific & Industrial Research Organization, Australia の Research Secretary (Scientific Services) であるオーストラリア人 Frank G. Nicholls 氏が、国連専門家としてタイ国に赴いた。Nicholls 氏は1960年6月から1カ年にわたり、タイ国にある各種研究施設等の実態をくまなく調査し、その結果を勧告にそえて3冊の報告書にまとめあげ、これをタイ国政府に提出した。これがいわゆる「ニコルス報告」と呼ばれるもので、その後のタイ国の研究開発計画に方向づけを与えることとなったのである。

「ニコルス報告」に盛られた勧告は、1963年5月、“The Applied Scientific Research Corporation of Thailand” の設立によって具体化の第一歩を踏み出すことになった。²⁾ これは国家開発に関連ある科学研究の実施および援助を主たる目的とする半官半民の「事業団」である。何事も「官」でなければおさまらないタイ国において、国家的規模の科学研究の推進機関をどうして「事業団」組織としたのだろうか。この点を理解するためには、上述した「ニコルス報告」の次の一節が示唆に富んでいる。

「タイ国では、最もすぐれた知的能力をもつ人に研究者の道を選ばせるような条件がととのっていない。研究者の就職機会に限られているし、給与も低い。そのため理科系の優秀な学生は就職条件の有利な医者や技術者を志望する。そこで研究機関には、いきおい凡庸な頭脳が集まりがちであり、研究所のスタッフに占める女子の比率はいや増しに増加してゆくのである。」³⁾

タイ国の文官の給与は、「文官委員会」の制定した給与表にもとづいて支給されるが、その格付けは画一

的で、職種による給与の弾力性はまったく期待できない。そこで同じく官途につくのであれば、労多くして楽達の機会に恵まれない研究職よりは、むしろ幅広い将来を約束される行政官を選ぶ傾向が大きいのである。こうした実情の下では、海外留学を終えた優秀な研究者が、ついつい給与のよい外国系の民間企業に流入しがちである。政府機関である研究所では、いくら有能な人材であっても「官吏給与規程」の枠をこえることは不可能だからである。“Research Corporation” が「事業団」組織をもったというのは、そうすることによって、「官吏給与規程」にしばられた在来の研究機関では不可能であった高い給与を支給することが出来、それにより秀れた頭脳を糾合するためであると言われているのはこうした事情を考慮に入れる必要があろう。この Research Corporation には次の5つの研究施設の附置が計画されている。

- (1) Technological Research Institute
- (2) Agricultural Research Institute
- (3) National Standards Laboratory
- (4) Nutrition and Food Sciences Research Institute
- (5) Preclinical Medical Sciences Research Institute

このうち(1)の Technological Research Institute については、1964年11月19日、タイ国政府と国連特別基金との間に協定が成立し、その設置が決定した。この協定の内容は、国連特別基金から84万6300米ドルを支出し、タイ国政府が Counterpart Contribution として、308万3930米ドル相当の現物を提供し、1964年から69年にかけての5カ年計画で Technological Research Institute の設置を行なおうとするものである。この Institute は、天然資源、とくに工業開発のために利用できるタイ国産原材料にかんする技術的研究を主な目的としており、つぎの5部門に分れている。

- (1) 化学、薬学部門
各種植物の工業的利用についての研究を行なう。
- (2) 鉱物利用・冶金部門
鉱産資源の開発および近代的陶磁業開発のための粘土等の研究を行なう。
- (3) 建設資材・技術部門
新製品開発を目的とした国産建設資材の研究を行なう。

1) (1) Frank G. Nicholls, *A program for the Development of Scientific Research in Thailand*. 1961

(2) Frank G. Nicholls, *The Development of Applied Scientific Research in Thailand; Stage One*. 1961

(3) Frank G. Nicholls, *Supplementary Notes on the Development of Applied Scientific Research in Thailand; Stage One*. 1961

2) “Applied Scientific Research Corporation of Thailand Act. B. E. 2506” given on the 20 th Day of May, B. E. 2506 (1963) により設立された。

3) Nicholls, *A Program*. p. 8

(4) 繊維部門

各種繊維の研究および、絹、木綿その他の繊維を生産する工場の機能と製品の品質の向上をはかる。

前述したように、この Institute は、目下 heavy-duty workshop の一部の準備工事が進行している段階にある。

3

Research Corporation 附属施設の第2に予定されている Agricultural Research Institute は現在国連特別基金に援助要請が行なわれている模様だが、その要請の内容は次のとおりである。

国連特別基金 117万9600米ドル

外国政府 Counter Part Contribution

154万2365米ドル

期 間 5 カ 年

この Institute は、農業省、国家開発省、カセーサート大学と共同で研究を推進するもので、つぎの4項目を一般目的としている。すなわち、

- (1) 農産物の生産性向上にかんする諸問題（土壌および水を含む）の研究
- (2) Soil management policy 立案のための基礎的データの提供
- (3) 農家経営の多角化のための効果的方法の開発
- (4) 農民の生活水準の向上

上記の大筋にしたがって、第1段階として東北タイと中部平原を対象とした各種のプロジェクトを計画しているが、詳細については適当な研究担当者の recruit が可能であるかどうか左右されとし、outline を示すにとどまっている。また農業研究の重要分野であっても、すでに他の研究機関によってとりあげているものについては含まないとして、林業、水産、食品加工、家畜衛生を除外している。この Institute の第1期5カ年計画に含まれている個別計画は全部で6つの研究計画が数えられる。

(1) Land Research (地形・地理学の調査)

これまで各個別々にあつめられてきた各地域にかんする諸データの総合調整。特に東北タイにおいては航

空写真を利用した地形図、農業気候統計の完成。Dept. of Land Development, カセーサート大学との共同による great soil types にもとづく general soil map の作成や、植生調査などをもくろむ。

(2) Soil Sciences (土壌学の調査)

土壌化学、土壌物理学、土壌微生物学の基礎研究の促進、および特に東北タイの grey soils の動態の研究ならびに湛水状態における土壌栄養分の動態の研究などをおこなう。

(3) Plants Sciences (栽培植物学の調査)

他の政府研究機関によってこれまであまりとりあげられなかった栽培植物、たとえばケナフなどの繊維植物、油作物、飼料作物などの研究のほか植物栄養学的調査、栽培植物の病虫害防除の研究を促進する。

(4) Animal Sciences (畜産学の調査)

畜産局、カセーサート大学と共同して、特に水牛、牛について家畜生産、育種ならびに飼料の研究をおこなう。

(5) Economic Studies (農業経済学の調査)

マーケティング、生産費、その他農業生産に影響をおよぼす諸要因の社会経済的側面の調査。既存の統計資料の信頼度の検討、農業立地の評価のための資料収集、その他関連分野の調査をおこなう。

(6) Mathematical Statistics & Design of Experiment (数理統計学および実験計画法の調査)

農学の各分野にわたる実験計画の立案および、実験結果の解析、評価を電子計算機によりおこなう。

む す び

以上“Applied Scientific Research Corporation of Thailand”の活動の一端を紹介してきたが、これはこれまでのタイには見られない総合的科学研究組織を目指すものであり、もしこれらの計画が成功すれば、官庁間の縦割り行政が屢々指摘されるタイ国の各方面にすくなく影響を与えるものと思われる。伝えられる要員確保の困難が克服されて、パンケンが、タイ国における科学研究のメッカとなる日の来らんことを期待したい。